

緋弾のアリア 黒き血を継ぐ者

白琳

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「俺は昔、1人の少女を助けられなかった」

だから俺は決めた。友達も、仲間も、大切な人も……大事なもんは絶対に守ると。

そして武偵になった俺は親友・遠山キンジと共に東京武偵高2年の始業式に向かう途中で——少女と再会し、世界を巻き込む戦いに足を踏み入れるのである。

※今作品は緋弾のアリアとゴジラのクロスオーバー作品ですが、ゴジラ要素は少ないです。《ゴジラが熱線吐いたりして戦う》展開などはない為、ご注意ください。

目次

第1弾 再会と始まりの事件《武偵殺し編》

E p i s o d e 1	始まりの朝	1
E p i s o d e 2	女の子が空から降ってきた	10
E p i s o d e 3	再会の硝煙と斬鉄	19

第1弾 再会と始まりの事件 《武偵殺し編》

Episode 1 始まりの朝

「………退屈だ」

今日は親父が昔から親しい関係と言う女性の誕生日パーティーだ。しかし呼ばれた当の本人である親父はその女性の護衛係で付きつきりであり、「暇だろ?」という理由で連れてこられた俺は暇をもて余していた。

(にしても……色んな人がいるな)

どこを見ても大層なドレスやスーツを着たおばさんやおじさん、彼らの子供も俺とは違ってお洒落な服を着ている。別に親父に着せられたこの服がお洒落じゃないというわけではないが、明らかに見劣りしてるだろう。それくらい、有名人や金持ちが多いのだ。

「——…ねえ。アンタ、もしかして一人なの?」

「ん?」

突然声を掛けられ、椅子の背もたれに腕をかけ振り向く。そこには背中の開いた白いサニードレスを着た、俺よりも背の低い少女がいた。ツインテールに結われた金髪の髪にサファイアみたいな紺碧の瞳をした少女だ。

「まあ、こつちにや喋る相手なんていねえしな」

「ふーん……」

「ちなみにそつちは?」

「あたしは……別に一人でもいいのよ」

つまり俺と同じく一人ぼっちと。

「名前なんて言うんだ?俺は黒堂竜牙こくどうりゅうがって言うけど」

「神崎かみざき・ホームズ・アリアよ。アリアでいいわ」

神崎・ホームズ・アリア……ん?神崎?それにホームズ?

「もしかして神崎かなえさんってアリアの母親だったりするか?」

「ええ、そうよ」

神崎かなえ——今日の誕生日パーティーの主役であり、あ

のホームズ家に嫁いだ、俺の父親と親しい関係である女性。今はここより奥の方で親父付き添いの元、色んな人達と話をしている。

しかしとなるとこの少女があつた有名なシャーロック・ホームズの子孫……まさか俺と同じ年、もしくは年下とはな。しかも世間一般で言えばかなりの美少女である。

「そういうアンタも、ママの護衛してる人が？」

「ああ、俺の親父だ」

「……経歴を聞いたけど、凄い人ね」

くんどりゆうび
黒堂竜尾

——元公安0課の一員であり、人間ヤメマシタSDAランキング

5位の正真正銘の化け物。だからこそ今日の護衛にも選ばれたわけだが。

「お互い暇みただしき、なんか話そうぜ」

「いいけど……何を話すのよ？」

「んー……あ、アリアって兄弟とかいるのか？」

「妹ならいるわよ。メヌエツトって言うの」

へえ、妹がいんのか。

「羨ましいな、俺は兄弟いないからさ」

「なら会ってみる？」

「え、いいのか？」

「いいわよ。と言ってもあの子、足が不自由だからここにはいないの。パーティーの後なら、会えると思うけど」

「それでいいぜ。親父ならいいって言ってくれるだろうし……あ、そうだ。ならさ、ついでにこの家を探検……っ？」

……何だ、この違和感？さっきまでと今とで突然何かが変わった。なんかこう……空間にすき間が空いたような……。

『——アリア！避け——！』

「えっ？」

「っ!？」

どこからなのかは分からないが、突然聞こえた声。その後には発砲す

る音が聞こえ、俺の隣にいたアリアが倒れたのはほぼ同時の事だった。

「アリア!!」

アリアが撃たれた事に気付いたのはすぐだった。背中の左側に撃たれた痕がある。しかし撃たれた場所がまだ良かったのか、幸いにも出血量は少ない。意識は朦朧としているらしく、俺の声は届いていないが。

「おい、アリア! しつかりしろ! アリア!!」

「どうした!? つ、全員伏せてろ! アリア嬢が撃たれた! まだ犯人がいるかもしれない!」

「ア、アリア……? そ、そんな……いやあああああつ!!」

親父の声が聞こえ、アリアの母親であるかなえさんの悲鳴が部屋全体に響いた。

そしてアリアが到着した担架に乗せられるまで、俺はただ彼女の名前を叫ぶ事しか出来なかったのだ。

「……い。おいってば……大丈夫か、竜牙?」

「……ああつ」

俺が目を覚ますと、そこはベッドの上。正面にはよく知る天井。そして横を向けば、俺を心配そうな顔で見るルームメイトの姿があった。

「よお……キンジ」

「いや、よおじゃなくて……大丈夫なのか？なんかうなされてたぞ。声掛けても起きないし、悪い夢でも見てたのか？」

悪い夢……なるほど、まさか4年前のあの事件を夢に見るなんて久々だな。当時はしばらく夢に出てきていたがここ最近は全然見なかったのに。何か悪い予感でもするんだろうか？

「まあ、ちよつとな……うっ、汗でベトベトする」

「大分うなされてたからな。シャワー浴びてきたらどうだ？」

「そうする」

ルームメイトの提案に従い、俺はベッドを出て浴室へと向かう。時計を見ればパパツと入ってしまったばまだ学校に間に合う時間だ。

ちなみに俺と同じこの部屋を共有するルームメイトの名は、遠山とみやまキンジ。入学試験からの付き合いだがその関係は親友とも言える。あつちがどう思ってるのかは分からないが。

しかし入学試験で互いに最後まで残り、カルテットではチームを組み、あの事件で腑抜けになったあいつに渴を入れたり……今までの事を考えればそう思っても仕方ないだろう。

軽くシャワーを浴び終え、そのまま武偵高の制服に着替える。ワイシャツを着て学校のズボン履き、ネクタイを軽く締める。そして防弾製の学ランは前のボタンを外したまま羽織って洗面所を出た。

すると出た途端に美味しそうな匂いが漂っている事に気付いた。キンジの奴が料理をするとは思わない為、たぶんあいつの幼馴染みだろうなと思いつつリビングに顔を出す。

「よっ、白雪しろゆき」

「あつ、りゅ、竜牙くん。おはよう」

リビングにはルームメイトのキンジの他にもう一人、知り合いがい

た。武偵高のセーラー服——純白のブラウスに臙脂色の襟とスカート——を乱れ一つなく着た、前髪ぱつっんの黒髪の少女。
星伽白雪^{ほとぎしらゆき}。星伽神社の巫女であり、キンジ曰く、「絵に描いたような大和撫子」との事だが正にその通りである。

「こりやまた……朝っぱらからよく作れるよな」

「う、ううん、ちよつと早起きしただけだし……それに昨日まで伊勢神宮に合宿で行つて、キンちゃんのお世話できなかつたから……」

テーブルの上に置かれている漆塗りの重箱の中には玉子焼き、エビの甘辛煮、銀鮭、西条柿といった豪華食材に白く光るご飯。……ちよつと早起きしただけでこндаけ作れるとかホント凄いよな。しかもうまいし。特に和食。

「白雪は絶対、いいお嫁さんになれるな」

「お、お嫁さんさんだなんて……そ、そんな、ま、まだ早いよ……」

両手を赤くした頬に添え、照れる白雪はキンジの方をチラツチラツと見ている。あいつは飯食つてて気付いてんのかどうか知らんけど。

……まあ、見て分かるように白雪はキンジの事が好きだ。幼馴染みだし、昔から一緒みたいだから意識しててもしようがねエけど。ただ、相手はまったくその好意に気付いてないが。

「あつ、竜牙くんにも作ってきたんだ。良かったら食べてっ」

「マジか、この量を二人分作るとか絶対に俺には出来ん。ありがとな、白雪」

「ううん、どういたしまして」

「んじゃ、いただきますっ」

蒔絵つきのフタを開け、まったくそっくりに並べられている料理を見て涎が垂れそうになる。白雪から渡された塗り箸を使って食べ始めると、食後のデザートらしいみかんを食べ終えたキンジが口を開いた。

「……えつと、いつもありがとな」

「まだお礼言つてなかつたのかよ」

「お前が来たせいでタイミング無くしてたんだよ……」

知るか、んなもん。言うんだつたら食べる前に言え。そして食べ終

わつたらごちそうさまでしたを言え。

「えっ。あ、キンちゃんもありがとう……ありがとうございますっ」

「いや、何でだよ」

「そ、そうだぞ白雪。何でお前がありがとうなんだよ。あと、顔上げろって」

「だ、だって、キンちゃんが食べてくれて、お礼を言ってくれたから……」

嬉しそうな顔を上げた白雪は目を潤ませながら蚊の鳴くような声を出す。キンジの事が好きすぎるとはいえ、これだけでこうなるか。まあ、昨日まで合宿で会えなかったんだし、その反動もあるか。

「——あ」

意識していたわけではない。だが白雪が前屈みになってた+セーラー服の胸元が緩んで開いてたせいもあって、白雪の大きな胸の谷間が見えてしまった。しかも黒いレースの下着がバッチリと丸見えである。

「……黒か」

「えっ?」

「いや、こっちの話だ。気にすんな」

高校生で黒ってちよつと攻めすぎじゃないか?俺もそういうことに興味がないわけじゃないが、親友の幼馴染み相手にそういう目は向けたくない。だからすぐに目は逸らしたが……まあ、大方キンジにいつ見られてもいいように黒を着てるんだろうけど。実際に見られたらすぐ逃げ出すと思うが。

「……ごちそうさまっ」

キンジが突然勢いよく立ち上がる。……あー、なるほど。こいつも白雪の下着が見えたって事か。で、危ない感覚がしたから逃げたって事か。

まったく、キンジの特異体質は扱いにホント困るよな。

「んぐっ……ほい、ごちそうさま」

「お前、絶対噛んでないだろ!」

「ふぎげんな。こんなうまい飯を噛まないで飲み込むたアそんな真似

できつかよ」

「お粗末様でした。そう言ってくれると、作った甲斐があるよ」

ほら、白雪もこう言ってくれてるだろ。まあ、重箱をテキパキと片付けてキンジの学ランを取りに行っちゃったが。

「……歯ア磨いて準備すつか」

そう言つて洗面所に行き、歯を磨きつつ最後の準備をする。壁に立て掛けてある刀、“黒羅”の鞘に付けられた紐を腰に巻き付ける。それからベッド脇に置いておいた拳銃、グロツク17の弾を確認してベルトのホルスターに帯銃させる。

校則の一つに、『武偵高の生徒は、学内での拳銃と刀剣の携帯を義務付ける』というのがあるからな。普通の高校には絶対でない校則だ。今じゃ『普通の高校への転校』を目指しているキンジからして見れば、ウンザリするようなもんだらうな。

「キンちゃんも竜牙くんも、今日から一緒に2年生だね。はい、防弾制服」

「ほう、ほうだな」

「……始業式ぐらい、銃は持たなくてもいいだろ」

「ダメだよキンちゃん、校則なんだから」

そう言う白雪に、ホルスターごと拳銃を帯銃させられるキンジ。まあ、その気持ちも分からなくはないが武偵である以上、何が起こるか分からないしな。

「それに、また武偵殺しみたいなのが出るかもしれないし……」

「武偵殺し?」

「ぺっ……ああ、年明けに周知メールが出てた連続殺人事件の事だろ?」

武偵の車などに爆弾を仕掛け、自由を奪った上で短機関銃のついたラジコンヘリで追い回し、最後には海に突き落とす。確かバイクジャックとカージャックで2人が犠牲になったはずだ。

「でも武偵殺しは逮捕されたんだろ?」

「つつても模倣犯が出ないとも限らないだろ」

「う、うん……それもそうだし、キンちゃん……それに竜牙くんも今朝

の占いで、女難の相が出てたし。もしもキンちゃんの身に何かあったら、私……ぐす……」

あの、白雪？俺だけついでもたく言うのやめてくれないか？別に女難の相が出てても気にしねえけど、もうちょつと俺の身も心配してくれたら嬉しいんだが……無理か。

「分かった分かった。ほら、これで安心だろ。だから泣くなつて」

そうやって棚から出したナイフ……兄の形見であるバタフライ・ナイフをポケットに収め、白雪を慰めにかかる。

キンジに白雪を任せ、俺は黒い名札を制服に付ける。武偵高では4月だけ生徒全員が名札を付けるルールがある。まあ、1年は上級生の名前知らんし、こつちも1年の名前知らないからまあ、その為だろうな。

「俺はメールをチェックしてから出るから。白雪、お前は先に行つてろよ」

「あつ、じゃあ、その間にお洗濯とかお皿洗いとか」

「いいからっ」

キンジの言葉に従い、部屋から出ていく白雪。

……キンジ、お前にメール送る友達なんていねえだろ。

「やつてもらえばいいのによ。あんな世話焼きな幼馴染み、なかなかいねえぞ?」

「いいんだよ、自分でやるんだから」

「やった事ほとんどねえだろ、ぐうたら」

そう言われると返す言葉がなくなつたのか、PCの前に座り、白雪に言った通り（来てない）メールBOXをチェックしたり、Webを見始めた。その姿に溜め息を吐きつつ、俺もまだ時間があるからと少し眠る事にした。

———が、それが良くなかった。

「………いー!おい、竜牙!起きろつてばー!」

「んだよ、キンジ……まだ時間あんだろ……?」

「ねえよ！今、7時55分！」

「……………あ？んじや、バスは……………」

「バスは58分発だ、絶対に間に合わない！だからチャリで行くぞ！ほら、急げって！」

キンジはこの7時58分のバスに乗り遅れた事を生涯悔やむだろう。だが反対に俺はこの事を嬉しく感じていた。

何故なら———神崎・H・アリアと再び会う事が出来たのだから。

Episode 2 女の子が空から降ってきた

「いやあ、チャリなんて久し振りだな」

「余裕こいてる場合かよ、遅刻すんぞ?」

バスに乗り損ねた俺達は2人並走してチャリを漕いでいる。近所のコンビニとビデオ屋の脇を通り、お台場が続くモノレールの駅をくぐる。すると遠くに見える、海に浮かぶような東京のビル郡。

ここ、武偵高こと東京武偵高校はレインボーブリッジの南に浮かぶ長方形の人工浮島、別名学園島の上にある。この島は、武偵を育成する総合教育機関なのだ。

ちなみにさつきから言ってる武偵とは、凶悪化する犯罪に対して新設された国家資格であり、武偵免許を持つ者は武装を許可されて逮捕権を有する。一見、警察みたいだが武偵は『金で動く』という所に違いがある。つまり金さえ貰えれば、武偵法の許す範囲内ならどんな荒っぽい仕事も下らない仕事でもこなす。誰が言ったか、つまりは『便利屋』だ。

とまあ、そんなわけだから武偵高ではもちろん、通常的一般科目だけでなく武偵の活動に関わる専門科目を履修できる。

強襲学部アサルトの強襲科、狙撃科スナイプ。

諜報学部レザドの諜報科、尋問科ダギュラ。

探偵学部インケスタの探偵科、鑑識科レピア。

兵站学部アムドの装備科、車輛科ロジ。

通信学部コネットの通信科、情報科インフォルマ。

衛生学部メデイカの衛生科、救護科アンビュラス。

研究部の超能力者捜査研究科S R、特殊捜査研究科C V R。

教務部の教務科マスタース。

教養学部の一般教科ノルマイレ。

ちなみに専門科目だが俺は強襲科、キンジは探偵科、白雪は超能力捜査研究科である。他に狙撃科やキンジと同じ探偵科にちよつとした複雑な繋がりがある奴らもいるが……まあ、今は説明しなくてもいいだろう。

「なんとか始業式には間に合いそうだな」

「そうだな。1学期の始業式から遅刻とか、内申点が下がるに決ま
て——」

『そのチャリには爆弾が仕掛けてありやがります』

「あ?」

「……へっ?」

突然聞こえてきた、脅迫文みたいな奇妙な声。いや、確かどつかで聞いた事がある……あ、思い出した。今ネットで人気のボーカロイド、あれで作った人工音声だ。

「……アレは」

周囲を見渡すと、俺達のチャリにいつの間にか併走してきていた——セグウェイ2台を見つけた。

車輪を2つ平行に並べただけで器用に走る、タイヤつきのカカシみてえな乗り物、それがセグウェイだ。

『チャリを降りやがったり、減速させやがると、爆発しやがります』
『助けを求めてはいけません。ケータイを使用した場合も爆発しやがります』

「なっ……何の冗談だ!何のイタズラだっ!?!」

「イタズラにしちゃ、マジすぎんだろ」

セグウェイには2台とも誰も乗っていない。その代わりに人が本来乗る場所にはさつきから人工音声を出してるスピーカーと、1基の自動銃座が載っていた。

「UZIウージーか……!」

その銃座からは秒間10発の9ミリパラベラム弾を撃つイスラエルIMI社の短機関銃サブマシンガンの銃口が俺達を見つめている。

「おい、キンジ!チャリのどつかに爆弾ねえか!」

「クソツ、何で俺がこんな目に……っ!」

チャリのあちこちをまさぐっていたキンジの表情が一瞬にして強張る。サドルの裏側——なるほど。

俺も自分のチャリのサドルの裏側に手を回してみれば、サドルの一番後ろ側、しかも極めて分かりづらい場所に何か仕掛けられていた。

……ただ普通に仕掛けただけじゃ俺に気付かれると思ったか。しかし触ってみた感じ、型までは分からんがプラスチック爆弾か。しかも大きさからして自動車が消し飛ぶサイズだ。

このチャリジャック……やり方からして犯人は武偵殺し、もしくはその模倣犯。キンジは絶対に模倣犯の仕業としか思っていないだろうが。

「……まずいな。おい、キンジ！俺について来い！」

「お、おうー！」

こんなもんがここで爆発したら怪我人がでる。とにかく人けがない場所……第2グラウンドがいいか。距離がまだあるが、ここから見た感じいつも通り誰もいない。

「おい、竜牙！どうすりゃいいんだよ！」

「とにかく第2グラウンドに向かうぞ！そこからは……うーん」

「お、おいっ！見捨てるとか言うなよ！」

「言うかつっのー！」

しかし……マジでどうするか。正直俺だけだったらどうとでもなるが、今はキンジがいる。しかもあのモードじゃない普通のキンジだ。見捨てるなんて真似は出来ないし、どうやって――

「……うーなんだ、あれ……？」

突然キンジがある一点を凝視する。視線の先を見れば、7階建てのマンションもとい女子寮の屋上の縁に、女の子が立っていた。

武偵高のセーラー服。

遠目からでもハッキリと分かる、長いピンク色のツインテール。

そんな彼女は、躊躇いもなく屋上から飛び降りやがった。

「はああああっ!?!」

「ちよっ、ふざけんな!!」

この状況で自殺する奴が現れるか普通!?!しかも武偵だぞ!?!と思っただが、その女子生徒は事前に準備してあったと思われるパラグライ

ダーを空に広げ、滑空を始めた。

……一体何のつもりだ？と思っていると、そのままこっちに向かって降下してくるではないか。

「バツ、バカー！来るな！」

「このチャリには爆弾が仕掛けられてる！巻き込まれんぞ！」

俺とキンジが叫ぶが、聞こえていないのか女子生徒はこちらに迫りながら左右の太ももに着けたホルスターから、それぞれ銀と黒の大型拳銃を2丁抜いた。

「ほらそのバカ2人！さっさと頭を下げなさいよ！」

「えっ？はあっ!？」

「っ、バカ頭下げろ！」

俺がペダルを漕ぎつつも並走しているキンジの頭を上から押さえつけると同時に、女子生徒がセグウェイ2台を銃撃した。UZIの銃口が反撃の火を吹くヒマもなく、銃座と車輪はバラバラになって俺達に置いていかれる。

……うまいな。あまり射撃の腕に自信がない俺から見ても今は凄いと分かる。そもそもあんな不安定な体勢から弾を撃って命中する事自体が驚きだ。多分ランクはSで間違いないだろう。

しかし————これでハッキリした。パラグライダーが準備してあった以上、あの女子生徒はこのチャリジャックが今日起きる事を知ってたんだろう。理由だったり方法だったりとは分からんが。

とにかく俺達を助けてくれるんだったら、やるべき事は一つだ。

「おい、ピンク頭!!」

「だっ、誰がピンク頭よ！風穴開けるわよ!？」

「俺よりもこっちのバカを助けてくれ！俺は自分でどうにかする！」

「！……分かったわ！」

大型拳銃をホルスターに戻し、俺達の頭上を通る女子生徒と短い会話をし、横を向けばキンジが驚いた顔をしていた。

「りゅ、竜牙はどうすんだよ!？」

「言つたろうが、俺は自分でどうにかするって。お前はあのピンクあ「風穴!!」……あの子に助けてもらえ」

俺はキンジにそう言ったのを最後にペダルに掛ける力をもう一段階上げる。今まではキンジの速さに合わせていたが、もう合わせる必要がないからな。

それに――

「やっぱいたか」

ビルの合間や横道などから出てきて俺を追ってくる5台のセグウェイ。さつき女子生徒に壊された2台と同じく、それぞれにスピーカーと銃座から俺に銃口を向けるUZIが載せている。キンジと走ってた時に似たような形がチラチラと見えてたからもしかしてとは思ってたが。

「この辺でいいか」

この追いかけてつこを終わりにする為わ俺が辿り着いたのは高さが低い建物が比較的多い場所。俺はそこで、

「よっ――はっ！」

自転車から飛び降り、地面に着地すると共にチャリを自分の頭上へと蹴り上げた。その時間、1秒以下であり、セグウェイには俺が降りた事すら気付かれていない。

「烈脚砲！」
れつきやくほう

?????
ドントツ!!!

轟るで大砲の弾を撃ったような大きな音が鳴り響く。真上へと蹴り飛ばされたチャリは一瞬にして遙か上空にまで届き、次の瞬間には閃光と轟音が大空に響き渡った。

――チャキツ。

「遅い――閃滅」
せんめつ

チャリに向けられていた銃口が俺に向き直るが、既に手遅れだ。鞘に手を添え、黒羅を引き抜いて……カチン、と納める。

ほんの一瞬の後、後ろを振り向けば、セグウェイもUZIも銃座も、全て俺に斬られてバラバラとなり、ガラクタの山となっていた。

ドガアアアアンツツ!!!

「おっ」

少し離れた場所で大きな爆発が起きる。キンジもあの助けに来てくれた女子生徒も無事だといいいんだが。

「……なーにしてんだよ、キンジお前？」

爆発が起きた場所から桜の木に引つかかっていたパラグライダーを見つければ、その先にある扉が外れた体育倉庫の中を覗けばあの女嫌いのキンジがさっきの女子生徒を抱っこしてた。

正確には防弾製（というか武偵高じゃほとんどの物が防弾製）の跳び箱にハマったキンジの上に気を失った女子生徒が覆い被さってるだけだが。

「女は嫌いって言いながらこんな小さな子はアリなのかよ？お前、口リコンか」

「んなわけないだろ!?!いいから早く助ける!」

「へいへい」

しつかし……よくは見てないが、体格は中等部……いや、最近始まったインターン制度で入ってきた小学生と言われてもおかしくない位にはチビっ子だな。

「へ……へ……」

「あん？」

「へんたいー!」

突然聞こえてきた声はどこか聞き覚えのあるアニメ声みたいな、ちよつと鼻にかかった幼い声。

「さつ、さささつ、サイッテー!!」

意識を取り戻した女子生徒がぼっ！とブラウスの前側を下ろしたのが分かった。あー……キンジが邪魔して気付かなかったが、どうやらブラウスがめくれてたらしい。つまりは下着をキンジに見られたってわけか。哀れキンジ。

「おっ、おい、やっ、やめろ！」

「このチカン！恩知らず！人でなし！」

ばかぼこばかぼこ！と、女子生徒のあまり痛そうに見えないパンチがキンジの頭を襲う痴話喧嘩が始まった。

「……どうでもいいけど、そこで痴話喧嘩してる二人」

「っ?!いきなり誰よっ——ってああ、アンタ、無事だったのね」

「っ?!」

今まで下にいるキンジに顔を向けていた為、今までどんな子なのか分からなかったが……俺はこの子の顔を知ってる。髪色が金色ではなく、ピンク色だったから気付かなかったが……いや、だとしたら何で髪色と瞳の色が変わった事以外、あの時から何も変わってない？

「お前、もしかして——」

「っ!!横に飛びなさい!!」

彼女がそう言い、キンジと共に跳び箱の中へと隠れたのを見て俺は咄嗟に自分の状況を判断し、横へ飛んだ。

——ガガガガガッ!!

「ちっ！」

体育倉庫の壁へと隠れる前に飛んできた何十発もの弾の一部を黒羅で弾き返し、俺は無事に安全地帯へと逃げ込む。

「まだいんのか……」

壁に隠れつつ外の様子を見れば18台のセグウェイが18丁のU字Iをこの体育倉庫へと向けている。キンジ達は跳び箱が防弾製だった事で助かったらしく、すき間からセグウェイに向かって銃弾が撃たれていく。位置的にも行動の早さ的にも撃ってるのは彼女だろう。

ズガガガッ！ガキンッ！

弾切れの音が跳び箱の中から聞こえた。一方、セグウェイ18台も

一度退き、今は並木の向こうに隠れている。

「強い子だ。それだけでも上出来だよ」

「……は？」

「おっ？」

何したか分からんがなったか、あのモード……ヒステリアモードに。

「きゃっ!？」

「ご褒美に、ちよつとの間だけお姫様にしてあげよう」

そう言つて彼女をお姫様抱っこしたキンジが跳び箱から倉庫の端

———というか、俺のすぐ近くに着地した。

「よう、相変わらずのキザったらしい言葉をどーも」

「本人に向かつて言うかな、普通？」

「別に今更だろ」

積み上げられたマットの上にちよこんと座らせられた彼女を尻目に、俺達はいつも通りに言葉を交わす。

「な、なな、なによ……!?!ど、どうしちやったのよこいつ!?!キャラ変わり過ぎよ!?!」

「まあ、簡単に説明するよこいつは———」

「竜牙、準備運動はいいか？」

ズガガガガガンツ!!

「んだよ、もう来たか」

「姫はそのお席でごゆっくり、な。銃なんかを振り回すのは、俺達だけでいいだろう？」

「俺は刀だけだな」

俺は鞘から黒羅を引き抜き、キンジはマットシルバーのベレッタ・M92Fを抜いて、奴らの射撃線が交錯するドアの方へと歩いていく。

「あ、危ない！撃たれるわ！」

「俺も今のキンジも撃たれねエよ。だからそこでちよつと待ってけ。

———アリア」

「……………えっ？」

後ろを僅かに見れば、アリアの紅い瞳が真ん丸になっていたのが特に印象的だった。

Episode 3 再会の硝煙と斬鉄

キンジが持つヒステリアモード（正式名称ヒステリア・サヴァン・シンドローム）という特性は……まあ、簡単に言うと、性的に興奮すると強くなる、以上。

つつても俺みたいに物理的に強くなるわけではなく、思考力・判断力・反射神経などが飛躍的に向上するのだ。

しかしキンジが女嫌いの理由は、このモードの発動条件だけではない。曰く、ヒステリアモードとは男が子孫を残す為に、女を守ろうと大なり小なりパワーアップする本能が異常に発達したものらしい。

その結果として、〃女子を何がなんでも守りたくなってしまい、〃女子に対してキザな言動を取ってしまう、〃状態になるのだ。そのせいで中学時代は一部の女子にイジメの復讐などに利用されたと聞いている。

しかも、その力のせいで実の兄を失ったと考えてるとなりやあ……な？

「来いよ、ポンコツ共。俺はアリアに聞かなきゃならねえ事があるんだよ」

セグウェイ1台にそう言った瞬間、一斉にUZIが火を吹いた。というかこつち2人なんだからもうちよつと分けて来いよ。まあ、何台来ようが負けるつもりはないが。

「閃滅！」

空中で細切れにされ、地面に向かって落ちていく鉄クズの雨の中を駆け抜ける。UZIの正面まで迫った所で、俺は黒羅を逆手に持ち、勢いよく振りかぶった。

「獣爪閃・二太刀！」

薙ぎ払われる黒羅の切っ先がまるで鋭い爪のように次々とUZI

に突き刺さり、貫き、叩き潰していく。それを止める事なく反対側からもう一度放てば、UZI及びセグウェイは11台の内、8台が破壊された。

——ズガガガガガッ！

残ったセグウェイ3台が、同時にUZIを撃ってくる。しかし弾が俺がいた場所に届く頃には、俺は斜めに並んだセグウェイ3台の遥か上を飛んでいた。

「飛槌斬!!」

落下重力を利用した一太刀がUZI3丁とセグウェイ3台を両断し、車輪を片方失くしたそれぞれはバランスを取る事も出来ずに左右に倒れた。

「ふうー……そっちはどうよ、キンジ」

「終わったよ。……それにしても相変わらずの強さだな。弾を、しかも何十発も斬るなんて」

「視て、腕を動かせば誰でも出来るぜ？」

というかチラ見したけど、一度に銃弾7発を正確に全部UZIの銃口内に撃ち込めるのも大分凄いと思うぞ？ま、まあ、俺よりはハードル低いし。俺だって3発くらいまでなら同じ事が出来るはずだし。

「悪いけど、俺はまだ人間を辞めたくないんでね」

「俺だって人間だわ」

そりゃ親父みたいに戦車やら戦闘機やら戦艦やらを相手に単身で戦ったんだったら人間を辞めてるって言われてもしょうがねえけど。

「……んで？何でアリアは跳び箱に入り直してんだよ？気に入ったのか、そこ？」

体育倉庫に視線を向けると、何故かアリアが跳び箱の中に戻っているのだ。そしてぼーっと俺達を見ていたが、俺に声を掛けられるとハッとして跳び箱の中へ引つ込んでしまった。

……いや、何でだよ？

「な、何であんたが教えてもないあたしの名前を知ってるのかは後で聞くけど……お、恩になんか着ないわよ。あんなオモチャぐらい、あたし1人でも何とかできた。これは本当よ。本当の本当」

……? 『あたしの名前』って言うてる時点で本人確定なんだが……
どうやらあつちが俺の事に気付いてないらしい。まあ、何故か髪色と
瞳の色以外は昔と瓜二つなアリアと違い、俺は身長も伸びたし顔立ち
も少し変わったしな。

「そ、それに、そつちのあんた!今のでさつきをうやむやにしよ
うたって、そうはいかないから!あれは強制猥褻!レッキとした犯
罪よ!」

ちなみにそのアリアは何やら跳び箱の中でうごめいてる。どうや
らスカートを直してゐるらしいが、ホックが壊れたのかうまくいかない
らしい。

「……おい、キンジ」

「なんだい?」

「お前がそれになった理由って、まさかアリアのスカートを――」
「それは断じてないと誓えるよ」

まあ、多分何かの拍子に壊れたんだろう。仮にキンジがホックを壊
したとしても、故意ではなく事故だろうし。

「アリア、それは悲しい誤解だ」

「誤解ですって!?!」

キンジがズボンを留めるベルトを外し、跳び箱に投げ入れてから少
し時間が経った後。アリアは跳び箱の中からキンジのベルトでス
カートを留めて出てきた。

ふわ、と見るからに身軽そうな体が、俺達の正面に降り立つ。

……うん、何度も確認するがやっぱりアリアだ。昔と変わらず背は
ちっこい。確かあの頃は142……今もツインテールを留めてるツ
ノみたいな髪飾りを上乗せしても145ねえな。

「ちよつとは落ち着けよ、アリア」

「……あんた、さつきからあたしを誰かと勘違いしてるんじゃない?
あたしは、あんたとは会った事も……な……い……?」

俺をじっと見つめるアリアの声が段々と勢いを失くしていき、つい
さつきと同じく瞳を大きく見開く。……やつと気付いたか?

「ね、ねえあんた……名前は?」

「黒堂竜牙。これで俺が誰だか分かったか？」

「竜牙っ!?!ほ、本当に竜牙なの!?!」

今までの中で一番驚いた顔をするアリア。まあ、当然っちゃ当然か。出会ってしばらくはよく顔を合わせていたが、今じやたまに電話やメールでやり取りするくらいだしな。だがそれでも東京武偵高に転校してきてんだったらメールの一つでもしてほしかったな。

「ほ、本当に……?」

「んだよ、信じられねえのかよ?」

「だ、だつてあんた、そんなに昔髪伸ばしてなかったじゃない。そ、それに……」

まあ、確かに髪は伸ばしたな。今じや肩に届くくらいには伸ばしてるし。そしてアリアは髪以外にも何か言いたい事があるらしいが、顔を赤くして俯いたまま黙ってしまったている。

「それに……その、かっこよくなってるし……」

「……かっこよく?」

「え、マジで?俺、かっこいい?」

「う、うん」

「なあ、キンジ。お前はと思うよ?」

「その前に同じ男の俺に聞く意味はあるのかい?」

あつ、確かに。言われてみれば、同性のこいつにかっこいいなんて言われても気持ちわりいだけだわ。

「ところで質問をしてもいいかい?」

「何だ?」

「何よ、強狼男」

「アリア、その呼び名は訂正してもらってもいいかな?」

「じ、事実じゃない。あ、あたしが気絶してるスキに、ふ、服をぬ、ぬぬ、脱がそうと……!」

あー……話が進まないし、ちよつとここはキンジの味方しておくか。

「アリア、それはあの爆風が原因らしいぞ?それにこいつだつて一人の武偵だ。そんな事をするような奴じゃない。親友の俺が保証して

やる」

「竜牙……」

「……分かったわよ。龍牙が嘘言うわけないものね」

いや、信頼してくれるのは嬉しいが流石に嘘を言った事はあるぞ？

「話を戻すけど……竜牙とアリアは知り合いなのかい？アリアはすぐには気付かなかったみたいだけど」

「俺、中学時代はほとんどイギリスにいたんだよ。それでアリアと会う機会がたまたまあったんだ」

「そうね。初めて会った時は色々あったけど」

突然何者かに撃たれたのを色々あったで済ましていいのか分かんが、自慢するような事じゃないしな。結局、あの時の犯人は捕まえるどころか誰なのかすら判明してないし。

「イギリスに……ああ、なるほど。そういえば竜牙の母親はイギリス人と日本人のハーフだったね」

「ああ」

つつても中学以前からお袋の実家にはよく行ってたけどな。中学時代は色々あってイギリスで過ごしたけど。

「そうだ。アリア、俺もおまえに聞きてえ事があんだけど」

「何よ？」

「何で髪色と瞳の色が変わってんだ？おかげで最初分かんなかったぞ」

「ああ、これ？実は——」

「なのに背は低いままだし。インターンで入ってきた小学生かと思っただぜ」

俺のその一言にアリアがピシッと固まる。……あ、やべ。地雷踏んだ。そういやアリアの奴、昔からチビなの気にしてたっけ。完全に忘れてたっというか……思った事が口に出てしまっていた。

「りゅ・う・がく？あんた、誰が——」

「えっと……ちよつと待て、俺が悪かったから落ち着けて。小学生って言ったのは撤回……あ」

「だ！れ！が！小学生よ!!」

アリアが左右のホルスターから銀と黒のガバメントを抜き、撃ってきやがった。弾丸は頭部を狙っていたが、俺は全ての弾を黒羅で斬り刻み、窮地を脱出する。

「躊躇いなく頭狙うんじゃないやねえよ!」

「うっさい！竜牙ならそのくらい余裕でしょ!!」

いやまあ、確かに余裕つちやよ『パァン!』『ガキンツ!』最後まで言わせろよ!?!途中で撃つてくんない!

「くそっ……キンジ、逃げるぞ!」

「りよ、了解!」

「待ちなさい！やっぱりあんたも、強狼の現行犯で捕まえて風穴開けてやるわ!」

「いっでえ!?!」

あ、ヒステリアモード切れてる。数分しか持たないんだっけか、あれ。

「たくっ、しゃあねえな!」

アリアが撃ってくる弾を黒羅で防ぎつつ、キンジと共に走り出す。俺のせいとはいえ、今のアリアを止める術はない。あるとすれば、それは時間の経過だけだ。

「待ちなさいーっ!でっかい風穴あけてやるんだからーっ!」

「あけられるもんならなっ!」

「か……勘弁してくれーっ!」

これが後に『エネイブル 罟』という『不可能を可能にする男』と呼ばれるようになる遠山キンジと。

後に『緋弾のアリア』として世界中の犯罪者を震え上がらせる鬼武偵、神崎・H・アリアと。

そして後に『くろがみ 黒神』という歴代最強の黒羅使いとなり、多くの者を

救う事になる黒堂竜牙の。

硝煙と斬った鉄の二オイにまみれた、面白くもちよつと危ない出会いと再会だった。